



天野桂子さん
(ダイニング・バー「ズーイン」オーナー)

「まもれシモキタ！行政訴訟」には、さまざまな人が原告として参加しています。今回は、南口にあるピュアロード（新栄商店会）のいっかくでダイニング・バーを営んでおられる天野さんにお話をうかがいました。

私にとっての 「下北沢」

——下北沢にお店を出した経緯は？
ひとことと言ってしまうと、一目ぼれかな。このお店は今年の9月で25周年なんですが、はじめは中野区南台でやっていたんです。そこが手狭になったので2軒目を出したと思います、いろんな街を探しました。それこそ銀座や新橋から、つくば学園都市とか八王子、千歳鳥山など一年くらいかけてあちこち歩き回ったんです。そんな時に下北沢にも来て…。

その時、「ああ、私もここに交ぜてもらいたいなあ」と思ったの。——この商店街ではフリーマーケットも開催されているようですが？
私がこの店をはじめたばかりの頃は、このあたりはまだ夜のライトもなく暗いし、南口のオマケのような場所だったの。けれど30軒くらいのお店が集まって、ここに独立の商店街を作ろうということになったの。

たった90メートルほどの小道とその周りの路地に沿ったお店だけだけど、コンパクトな集まりなので、まとまりがいい。フリーマーケットも、途中で誰かが言ったところからはじまって、今では三ヶ月に一度やっています。規模が小さいと、アイデアが形になりやすいのね。——天野さんにとって下北沢はどんな街ですか？
私は料理人ですが家庭料理しか作らないんです。この店をはじめて何年かたった頃、お料理を作るのがつらい時期があった。料理屋料理や宴会料理のなかの、独特の闘争心のような、社会に対して物申すというようなものが突き刺さってくるものがあつて…。

そんなある日、旧知の先生とおしゃべりする機会があつたの。先生は女流の邦楽笛方で、大変な名手なんだけど、ご家庭もあり、お子さんもいらつしやるのね。先生の芸談をうかがっている時に、「これだ！」と思うものがあつた。

まもれシモキタ！通信

まもれシモキタ！
行政訴訟の会

〒155-0031
世田谷区北沢2-9-19
植松第一ビル201
コモン法律事務所内

TEL: 03-5452-2015
FAX: 03-5452-2016
URL:
www.shimokita-
action.net

目次

- 1 インタビュー
私にとっての
下北沢
- 3 「まもれシモキタ
説明会」開催
- 3 第4回口頭弁論
が開かれます
- 3 お仲間紹介
- 3 ボランティア
募集！
- 4 下北沢でいま
起きていること

その時は、手はじめに「ハム、ベーコンは自家製にしよう！」と思ったの。

こういうことは手間ヒマかかるんだけど、自分のベースを作るというか、無理がない。つまり、自分の感覚の根源に嘘をつかない。嘘をついちゃうと、アテナが弱くなっちゃうでしょ。この時期に私は「良質の家庭料理を作るぞ」と決めたの。そして、私はそんな風にこれまで生きてきたのだけど、そんな私にとつて下北沢という街は、とても居やすいし、棘がささってこないのね。

——補助54号線や再開発計画は、どのように知りましたか？

そういう話になっていくというの、耳にしたり読んだりして、断片的には知っていました。「セイブ・ザ・下北沢」など複数の団体が活動しはじめていくことも認知はしていたんですが、しばらくそ

の状態のままでした。それが、計画の事業認可の採決が近づいた時、自分がこの断片的な情報しか知らないままに事態が進んでいくことが、恐ろしいと思った。だから小田急線の資料や区の広報を集めたりして、自分で調べはじめたんです。

私は、街は時代とともに動いていないと腐っちゃうと思ってるんです。それにその時々、風俗を反映していかない、面白くない。かといってシモキタは、こんな計画を持ち出さなきゃならない場所ではないと思った。

——訴訟の会に参加された経緯は？

「私には、時間もないし、力もないし……」って傍観してるのが、だんだん嫌になってきたんです。ちゃんと自分の意思を明らかにしたいと思うようになりました。それでどこかのグループに参加しようと思ひ、自分の日常生活や環境と照らしつ

訴訟の会に決めました。ところが、どうやって連絡したらいいかわからなくて……

そんな時、商業者協議会の署名が回ってきました。それで商協の代表者が「Lady Jane」の代表者が「Lady Jane」の大木さん（茶沢通りのジャズバー・オーナー）だと知り、大木さんと

は旧知の間柄だったのだから、Lady Janeに飛んでいって開口一番「私、訴訟の会に入りたいんだけど、どうしたらいい？」と言ったんです。

私は、過ごしやすいうちを作っていくと活動している人たちが尊敬しているんです。市民運動や、南口メインストリートの落書き消しをやってらっしゃる人たちもそう。反対とか賛成とかではなく、「より良い街を求めよう」という部分は共通している。その共通の思いを持った活動の互いの長所が共鳴しあって、大きな力になっていく、いいと思っています。事が起こっている時

に指をくわえて見てたってしょうがない。自分の日常生活をキープしつつも、街の動きに関わりをきちんと持つこと。そういうのつて、ひいては自分の人生に跳ね返ってくるから。目をそらしちゃダメだわって思ったの。

——下北沢でいま起こっていることをどう考えますか？

これって、シモキタの街だけじゃなく、日本中のいろんな地域でも同じだと思っ

きうきしたり、生き生きしていたり、幸せだと思ふ瞬間があったりする。そういう生き方が根づいている街。そういう大人たちを見て、子どもたちもそういう風に育つような街。そういう街が必要だと思うし、個人として、かくありたいと考えています。時間はかかっても、そんな風に、歯車がくると噛みあう時がくるんじゃないかと思っ

私には、いま下北沢で起こっていることは、反対運動じゃなくて、

文化運動だと捉えています。一つの文化運動としての資質がすごく高いと踏んでるんです。街には、長所もあれば欠点もある。いまはそれを問い直すいい機会じゃないですか。

こういうことを考えていく持久力、幸せに生きていきたいという、そういう情熱を持久していく自分のつくり方や、組織のつくり方が、物ごとを自分の目で見て、自分の心で考えていくことにつながっていると

（聞き手 小林みのり）

●天野桂子（あまの けいこ）



世田谷区代沢 2 丁目在住。料理人になる前は、劇団の演出部に在籍。照明の仕事に携わり、下北沢へは仕事のほか、よく飲みに来ていた。1982 年より下北沢南口にてお店をはじめる。日曜日の昼に料理教室を開いている。

キッチンに溢れる季節たち。素材に勝るコックはいません。優しい味を引き出すコツは毎日をうきうきと暮らすことです。

——天野桂子レシピ集より